

期待と祈りの中で



清野清子

この半年間、私はこの子らに対する何を為し得たであろうか。はなはだ、答えて窮屈する有様である。話し言葉をほとんど持たない上に、動きの激しい六人の子供たちを目前にして、まさしく、無我夢中の毎日であった。

無言のFちゃんの眼が、じっと私を見つめ、何かを訴えている。でも、私は何だかわからなかつた。「お願いお話しして、何をしたいのか、何が欲しいのー。ごめんね、わかつてあげられないで……」心の中で幾度となくわびる自分がたまらなかつた。ある時には行動を阻止されたU君が放尿し、どうしていいかわからず、うろたえ、またある時には、情緒が乱れたH君に親指をかみつかれ、千切れんばかりの痛さに叱る言葉もなくしてしまつた私であつた。

この子らの声にはならない心のつぶやきを、読み取る眼が欲しいと切実に願う毎日だった。

それでも、日を重ねることに、子供たちの表情やしぐさから何とか彼らの要求が理解できるようになつてきた。子供たちとの接し方にもゆとりが持つようになり、「子供に学ぶ」という姿勢の大切さを痛感させられている。とりわけ、K君とのかかわりは貴重な教えを受けるものとなつた。身辺処理には全面介助を要し、言葉がなく多動なK君、トイレでの排尿は成立せず失禁が続いた。十分ごとにトイレに連れて行つても、次回にはすでにパンツがぬれていた。ニコニコ顔のK君を叱る言葉はなかつた。叱つてみたところで、言語理解が全くできない彼には、

無駄なことだつたのである。
子供たちが帰つた後で、洗たくをしながら、「ああ、今日もこんなにか…」とため息混じりの言葉が口をつく。いつこうに滅らない、洗たく物の山を恨めしく見つめながら、空しさにおわれた。それでも、根気が大切とばかりに、括約筋の鍛錬のため手をつないで散歩させる一方、ひたすら定時排尿を続けた。初めは意氣込んでいた私も、三ヶ月、四ヶ月という時の流れに焦り、精神的にも疲れていた。そして、あきらめ心が頭をもたげかけてきたある日のこと、ついに、尿が便器を伝つて流れたのである。

「願いがK君にも通じたのね」という傍らの先生の言葉に、私はぎくつと



可能性を信じて……

期待と祈りーそれは、可能性への信頼があつてこそ生まれてくるものであろう。身振りで「チョウダイ」ができるようになつたU君。ひとりで給食が食べられるようになつたN君。絵カードと文字カードのマッチングができるようになつたFちゃん。目の前にいるこの子らの一つ一つの歩みが、それぞれの可能性を証明しているのではないか。

子供たちの一人一人に期待と祈りを抱きつつ、ともに成長して行きたいと願う毎日である。

(福島県立西郷養護学校教諭)